ブルーナーの教育論に関する一考察(3)
―教育論の形成過程を中心に―

今井　康晴
(2013 年 2 月 11 日受理)

A Study of Educational Theory of Bruner (3)
―Focus on the formation process of the education theory―

Yasuharu IMAI

This study examined the formation process of the education theory of Bruner from his autobiography. It is first and, as the reason, is studied life (home environment, friends and acquaintances, religion) of the childhood period in the prosopography. However, in the precedent study, it is not found what kinds of influence an experience in the childhood period of Bruner have on an education theory. Therefore, in this study, I examined his breeding or friends and acquaintances, student life. And it is to clarify it about the basics of his education theory. Focusing on youth from childhood in particular, consider focusing on things that have influenced and keywords for Bruner.

Key words: Bruner, Autobiography, Educational Theory, childhood

キーワード：ブルーナー，自伝，教育論，幼少期

はじめに

本研究は，ブルーナー（Jerome Bruner　1915 －）の教育論の形成過程を，彼の自伝的著作『心を探して　ブルーナー自伝』(*In Search of Mind Essays in Autobiography*）を主な資料として考察した。その理由として，二つ挙げられる。第一に，人物研究では，必ずと言ってよいほど，その思想形成の基底にある幼少期の検討（家庭環境，交友関係，宗教など）がなされている。ブルーナーにおいては，彼の教育論の変遷などを中心に，その変化を辿る先行研究[1]やピアジェ，ヴィゴツキー，デューイといった各学問領域を代表する研究者たちとの関わりに対する先行研究[2]が散見される。しかし，幼少期における体験や経験が，教育論にどのような影響を与えているか明らかにされていない。

第二に，これらの先行研究の共通点は，主著『教育の過程』(*The Process of Education*）を起点として，以降のブルーナーの研究に対しての変化の道程を検討している。このため，ブルーナー研究で用いられる文献は，心理学，教育学，文化を主なテーマとしており，『心を探して』を主体とした研究が管見の限りでは見当たらない。

そこで本研究の目的は，『教育の過程』を起点とした教育論の変遷を検討するのではなく，『教育の過程』以前，すなわち，彼の生い立ちや交友関係，学生生活などを検討することで，後に披歴した教育論の基礎について明らかにすることである。とりわけ，本稿では幼少期から青年期に着目し，親子関係や兄弟関係などブルーナーにとって大きな影響を与えた事柄やキーワードを中心に，教育論の形成過程について論考する。

『心を探して』は，「スローン財団」の叢書の一冊で，企画の意図として身近な生活に存在する科学が，門外漢には近寄りがたい実情に対して，高名な科学者が，科学における自らの人生を語ることにより，科学の理解を広めようとすることである[3]。本書は，「そもそもは」(In the Beginning)，「半ばでは」(In the Middle)，「結局は」(In the End）の 3 部構成となっており，幼少期から大学生活，心理学者としてのはじまりから『教育の過程』，ハーヴァードからオックスフォード，そして「心」という本質に迫っている。

訳者である田中一彦は「ブルーナー自身にとって，この自伝執筆は，おそらく大きな転回点であったにちがいない[4]」と述べるように，単なる自伝としてでは

なく，知的かつ科学的な著作として重視している。以上をふまえ，幼少期における母子関係や生活環境が，ブルーナーの後の研究にどのような影響を与えたかについて，検討する。

１．生い立ち

まず，ブルーナーの幼少期からデューク大学入学までを概括する。ブルーナーは1915年，ユダヤ人家族の4人兄弟の末っ子（長女のミン，次女のアリス，母の連れ子のアドルフ，ブルーナー）としてニューヨークに生まれた。子ども時代をニューヨーク郊外のファー・ロッカウェイで，3人の兄弟に，いとこのマーヴィンとジュリア[5]を加え，彼は一番年少の子どもとして過ごしていた。家庭は裕福な中産階級で，経済的には十分な収入もあり，父親と母親が金銭について話すことがないと語っている[6]。このため，子ども時代は，「卵黄の栄養でぼんやりと生きている，まだ孵化していないひよこのようなもの[7]」と述べている。

彼は，6歳から地元の公立小学校に通っていたが，彼にとって学校は，退屈でわずらわしい場所で特別な知的好奇心が湧かなかったと語っており，学業成績にしても学者とおもわせるような片鱗がなかったとしている[8]。子ども時代，彼は「利発な子ども」であり，12歳になるまで「坊や」（Sonny）と呼ばれるほど陽気で，快活だった[9]。そして6歳から父親との死別する12歳まで，この上なく幸せな時期と述べている。12歳になると父親の死に加え，姉のミンも結婚し，ブルーナーの生活から去って行った。このことにより，12歳以降の生活が大きく変化し，環境，人間関係，などすべてが崩壊した[10]。

その理由としては，父親の死をきっかけに，母親が毎年引っ越しを繰り返し，4年間で6度の転校したことを挙げる。先生との信頼関係や授業自体のつながりを理解することもなく，転校が重ねられ，その結果，学校への忠誠心が根付くことなく，失われた世界を考えつつ，新しい世界を発見出来ずにいたとする。ブルーナーにとって，父親を亡くしたことが一つの転換期として捉えられ，陽気で快活だった少年は，いつしか，かなり変わった若者―「いい奴なんだけど，でも変わってる」―となり，絶えず仲間入りすることが必要なよそ者と綴られている[11]。

学業面では優秀であったことを明かし，特に数学，歴史では良い成績を修めている。そして，ミンとアドルフの進めによって，プレップ・スクールに通い，大学進学適性試験を受験した。彼は，プレップ・スクールに通学するときから，一人暮らしをはじめ，その一人きりの時間，なかでも勉強している時間を楽しんでいた[12]。1933年，17歳のときデューク大学に進学しノースカロライナのダラムへと渡った。ブルーナーにとって家を出て大学に通うということは，子ども時代の殻を破ると同時，引っ越しを繰り返す前の楽しかった子ども時代以来の憩いの場所へと行くことであった。それは逃避ではなく，芋虫が蝶々になるという例えで綴っている[13]。

２．家族について

次に，幼少期においてブルーナーが家族について，どのように感じていたか概括する。

①父親について

まずブルーナーは両親を遠い存在として捉えている。父親については，仕事で旅行が多く，冒険好きで，人間の愚かさを語って喜ぶ懐疑的な人物としていた[14]。父親は，ポーランド出身で貧しい家の出で，十代で就学を終えると，織物工場に紡毛糸を販売する仕事をしていた。日露戦争に伴う戦力増強によって，徴兵されることを恐れ，アメリカのニューヨークへ国外逃亡した。そして紡毛糸のセールスマンから成功し，自分の会社をもつまでに至っている。

また地元の社会改良運動の主導者となり，マイモニデス病院を設立し，ユダヤ人保護委員会と，フリーメイソンの事前事業に従事した。ただ，父親は，ユダヤ教を崇拝しているわけではなく，ユダヤ的考え方に対する反儀礼主義という信条であった[15]。

読書，音楽を聞くことが趣味で座談を楽しみ，成功した実業家たちと家族ぐるみのつきあいをしていた。政治的には保守的で，社会観は個人主義，セオドア・ルーズヴェルトに感服していた。愛国者で「不平家」，「酷評家」，「偽善者」を嫌い。ブルーナーにおいて世慣れた人のイメージの基礎となっているのは父であると述べている[16]。そしてブルーナーが12歳になる1927年，ガンで亡くなった。亡き父親については，次のように綴っている。

> 一心理学者として，また一人の大人として，今から振り返ってみれば，いかに私が父に対して愛憎共存する感情を抱いていたか，そしていかにその愛憎の共存が後半の価値観にとって肥沃な土壌であったかがわかる。私は彼の世俗性と機知を愛していた。彼の旅行は世界を身近なものにし，とりわけヨーロッパを身近なものにしてくれた。彼の機知のおかげで，世界が刺激的でしかも処しやすいところ

になった。移住してきた父親はヨーロッパ人，子どもはアメリカ人という場合によくある例とはちがって，私は彼を拒絶しなかったし，彼を「恥じる」という思いも，一度もよぎることはなかった[17]。

②母親について

母親については「空想に耽ったり冗談を言ったりすることのほとんどない女性」，「従順な妻であり，きちんと面倒をみる母親であったが，うちとけない閉じこもった人」，「子どもに対しては―キスや抱擁など，さらにことばによってさえ―どんな愛情もあからさまに示すことはほとんどなかった」，「決して感情をあらわに示す人ではなかった」と語っている[18]。

その関わりにおいては「私には母が抱きしめてくれた思い出がない。友達がその母親から愛情のこもった出迎えを受けるのを見て私は当惑したのを覚えている。母は自分が盲目の子どもを生んだとわかってショックだったにちがいない。･･･彼女の情緒的なふれ合いといえば，もっぱら病気のことで，子どもの頃病気の時には，いつもおいしいスープ『ビーフティー』を飲ませてくれ，そうして看病してもらっていたときが，いちばん彼女に親しさを感じるときだった[19]」とする。

この背景について，ブルーナーは，男の子が欲しい（長男のアドルフは連れ子であるため，自分の息子が欲しい）という父親の希望と，母親の育児信念を挙げる。ブルーナーの母親は，子どもを褒めすぎると母親の尊敬を失うと考えていたこと，また子どもは二人まとめて（次女のアリスとのセットとして）育てた方が良いという母親の信念に基づいている。そうした「理論からできた子」であるにも関わらず，ブルーナーが盲目として生まれてきたという予期せぬ事態に対する落胆があったと考えられる[20]。

③長姉ミンについて

母親との関わりが疎遠であった代わりに，ブルーナーはひと回りほど歳の離れた，ミンを実際上の母親であった。母親と異なり，当時夢中になっていたこと，遊び友達についてなど何でも打ち明けられる人物としている。ブルーナーが 12 歳の時，結婚し，離れている。

④兄アドルフについて

異父兄弟であるアドルフは，特定の職業につくのではなく，散漫なディレッタントと語られている。またブルーナーの父親とうまくいっていなかった。しかし，ブルーナーが遠出する際には，アドルフが付き添い，自転車に乗る，釣りに出かける，飛行機に乗る，といった初めての経験に，常にアドルフの存在があった。加えてブルーナーは，自身の弱視に対してアドルフが一切斟酌しなかったことが，ブルーナーにとっては，兄弟の中でも心の許せる存在として語られている[21]。

⑤次姉アリスについて

ブルーナーと 2 歳ほど歳の離れた姉で，短気だがやさしい姉としている。ブルーナーが「扱いやすい」が，「神経質な」子であるのに対し，アリスはおてんばで，たくましい子であった。またブルーナーが，空想に耽る物事に集中するタイプであるのに対し，アリスは実際的で現実的な子として語られている[22]。

３．研究者への片鱗

ブルーナーは子ども時代を振り返り，心理学者としての人生との接点がまったくなく，将来知識人や学者まして心理学者になるといった，将来を予想させるようなものは，ほとんど見当たらないと語る[23]。父親は，ブルーナーを漠然と弁護士になるべきと考えていた。その理由として，専門職につかせて「出世させたい」というユダヤ人移民の願望と自分自身の顧問弁護士への感服と友情をあげる。

しかし，ブルーナーの弁護士を押し付けるということではなく，「堅実な中流階級」の生き方を求めていた[24]。こうした家族からの影響を受けつつも，ブルーナーは，自身の将来について確固たるものがなかった。

心理学者の道に「たまたま出くわした」という解釈にいたった背景には，2 歳を過ぎるまで盲目であったことを挙げている。2 回にわたる手術が成功し，目が見えるようになったことで，好奇心が人よりも強く，そのことが研究者へと導いたことを述べている。

研究（「知ること」の本質に心を奪われたか）については，登山家が「そこに山があるから」というだけでないのと同様，「ただそこにあるから」という理由ではなく，心理学ならば心理学，教育学ならば教育学という学問領域の境界線を設けることでもないと語る[25]。

知覚を研究しているうちに，事の真相はわれわれの推論する力の中に潜んでいると確信するようになり，私は思考の研究に転じた。われわれ心理学者が思考を研究する仕方は杓子定規にすぎ，われわれの「被験者」が直観を表現する機会をあまりにも欠いていると気づいたとき，私は目を転じて，発明家の集団を研究し，神話を読んで一時期を過ごした。それから，思考の過程はたいへんすばやいものなので，

もっとゆっくりとしたペースで進むもっと単純な状況の中で私の追求するものを見つけようと，認知発達の研究へと戻ってゆき，そしてしまいには乳児を研究していた。その後，初期の認知という原初的プロセスは言語によって形成されていると考えられたので，その言語を研究することによって，そうした冒険に終止符を打ったのだった[26]。

このように境界線という意味では，彼の研究課程を辿ってみても，知覚，思考，教育，言語，文化と多岐に亘っていることも容易に理解できる。

またこれらの研究が別個選択的ではなく，「心」，「文化」を基本として，統合されていることは，ブルーナーの大きな特徴といえる。幼少期における父親の愛読書『エンサイクロペディア・ブリタニカ』でものを調べることが楽しみであったことと，盲目から視力を与えられたことによる好奇心，これらの背景も彼の研究活動に反映されていたのである。

また彼は，父親の懐疑性によって，首尾一貫した思想体系に対して批判的思考を潜在的にもつこととなり，マクドゥーガル，パーソンズ，ピアジェといった心理学の偉人への感嘆と同時に軽蔑といった感情を抱いている。しかしフロイトに関しては例外で，偉大な理論家としてではなく，偉大な劇作家として捉えていた[27]。

ブルーナーにとって研究論文を書き上げるという行為は，思考の延長であり，他の研究者との共同を通した対話の延長であると述べる。4 人兄弟の末っ子らしく，「最新のもの」と言える論文を書くことが，自身の特徴であると述べる[28]。「研究者として，ブルーナーは“ムラのある選手”である。彼は主題を切り拓き，上澄みをすくいとって，後は他の人に引継がせる。細部には短気をおこし，そのプロジェクトの先が見えると退屈してしまう。･･･五年後に心理学がどうなるか知るには，今のブルーナーが研究しているものを見ることだという，仲間内の格言がある。それはしばしば作り笑いで語られるが実は名誉のしるしなのだ[29]」というレヴィンの書評にも表されているように，ブルーナーの盲目で生まれたという生い立ちや末っ子という家族構成が影響していることを物語っている。

また家族という捉え方において，彼は以下のように指摘する。

文化はある仕方で子どもたちの未熟さを，彼らを形成するのに，つまり彼らを「社会化する」のに「使う」ということ，これにはほとんど疑問の余地はないし，この「社会化過程」が学者たちの主要な関心主題だった時期が，社会科学の歴史にはあった。しかし，ほとんどふれられていない社会化の一つの特徴がある。それは，家庭やコミュニティーや，いや実は文化が，その中で育つ若者に対して課するコミットメントの程度とコミットメントの種類，これに関係があるのだ。ことによるとそれが，精神分析的にいえば同一化ということ―他者にならって，あるいは自分のグループによって規定される役割にならって自分自身を形成する過程―の意味なのである[30]。

80 年代以降，文化心理学を研究主題としたブルーナーは，自伝においても自らの幼少期と文化のあり方とについて，照らし合わせ考察を行っている。すなわち，対話，意味，ナラティヴなどの研究の基礎とも捉えられ，幼少期を客観化することによって，その理解を深めているのである。

4．幼少期におけるキーワード

最後に，幼少期から青年期の回想のなかで，幾度となく記述されたキーワード，また後の研究に影響を与えた事象などについて概括する。十代後半になると，ブルーナーの人生のキーマンとしてヒトラーが挙げられる。彼は，ヒトラーについて次のように回想している。

私にとってヒトラーは悪の権化―といっても，単なる悪ということではなく，逆らうものはことごとく壊滅しようとする悪という意味―であった。私の感情にとって，シンボルであり「テクスト」であったヒトラーの存在とは，私の子ども時代の産物ではなく，現代史上の事実であった。一九三一年，十六歳の少年の前にその文化がつきつけたもの，それがヒトラーだった。･･･彼は過去を現在に変えた神話的な人物だったと言うにとどめておこう。結局，私は「私自身の自由意志」から，彼との戦争に入った[31]。

ヒトラーとの関わりにおいて，着目すべきは，ブルーナーがユダヤ人であるということである。ブルーナー自身，ユダヤ人であるということが，以後の出来事のなかでも決定的な要因であり，多くのユダヤ人同様，それが重荷となって感じられることがあったという。したがって，そのことがブルーナーの人生の特徴であったことは言うまでもない。それは，ナチスドイツ，ヒトラーとの戦いの形態として，米軍諜報部での

活動や戦争広告における心理的作用という研究に直結したと推測される。

しかしながら，彼は，ユダヤ人としての誇りをもちつつも，宗教や信仰に対しては，消極的である。それにはブルーナーの父親の影響[32]や「自分で独立せよ，人をだましたり嘘をついたりするな，分相応の生活をせよ―それにもまして暗黙のうちに，家族，友人，コミュニティーに対して誠実であれ，さらに暗々裡にユダヤ人であれ―といった意味[33]」という信条が挙げられる。それは，信心深いということでもなく，ユダヤ人の模範ということではなく，人に対して情け深く，利口ではなく自分の知力を活用するということであった。

また自身をオプティミストではないと述べるように，ものの考え方，感じ方を変えるのは宗教への信仰ではなく，存在定理の力を重視している。このことは，教育改革へのアプローチにも反映され，子どもたちが「何が可能かを示すことが，人がなそうとする行為を変える[34]」という信念にも基づいている。

おわりに

本稿では，ブルーナーの教育論の形成過程について，『心を探して：ブルーナー自伝』を参照し，特に幼少期からデューク大学入学までを中心に論考した。ブルーナーの家庭環境においては，裕福な家庭に生まれ，4 人兄弟の末っ子として，特段の軋轢もなく，むしろかわいがられて育ってきた状況が伺える。しかしながら，両親に関して，特に母親については，充実した関わりはなく，父親がなくなった 16 歳以降は，母親の意向による引っ越しに対しての脱却が理解できる。

このことをふまえると，ブルーナーの 70 年代後半から 80 年代の研究，『子どもの成長と発達：その理論と教育』（*Human Growth and Development*），『乳幼児の話しことば：コミュニケーションの学習』（*Child's Talk: Learning to Use Language*），『イギリスの家庭外保育』（*Under five in Britain*），の一つのテーマとして，保育者，母親，子どもとの対話が挙げられている。無論，幼児の発達，言語獲得を主題としているものではあるが，幼少期の母親との関わりが研究の根底に全く影響を与えてはいないと言い切れないだろう。

ブルーナーはヘルマン・ヘッセになぞらえて，「成長とは，過去と向き合いそれを作り直すことであって，そこに何か決まった仕方があるわけではない。大事なのは，その作り直しである[35]」と指摘するように，作り直しの形態として，研究動機に反映されていたのではないだろうか。

また幼少期について，遊びとの関わりで次のように指摘する。

> 子ども時代の遊びは，それが何であれ遊んでいる対象にあまりにものめりこんでしまわないように緩衝作用をもつと同時に，子どもに自分の能力の可能性を探る機会を与えるのである。実際多くの社会は，子ども時代の遊び（と，遊びにのめりこむこと？）にきわめて寛容であり，それから成人期への「通過点」を厳しい儀式によってはっきり示す，といわれている。それは人生のある時期から他の時期への移行という魅力的なテーマで，その仕事ほど知的楽しみを味わったことはめったになかった[36]。

この知的楽しみの背景には，盲目であったことや，子どもの頃から百科事典で物事を調べたりするという体験に裏付けられている。そして注目すべきは，遊びを遊びとして捉えるのではなく，「可能性を探る機会」として位置づけ，そこに知的楽しみを見出すことにブルーナーの遊びに対する考え方の片鱗が伺えるのである。

自らの研究スタイルについて，様々な領域を網羅し，「最新のもの」ということが挙げられる。それは盲目から光を得たこと，末っ子であることなどを指摘しているが，ブルーナー自身強調しているように，認知，思考，言語という各研究が，バラバラではなく，文化という概念で統合されていることということである。これをふまえると，彼の研究道程を安易に変化，変容と捉えるよりも，大元の部分での思想を捉えることが肝要ではないだろうか。個人の私案としては，『教育の過程』は，ブーム化し過ぎ去ったものとして捉えられるが，その概念や意図は後の作品に影響していないのか，すなわち，どのように文化を主題とした研究に統合化されているかを考察することが重要ではないだろうか。

今後の課題としては，ブルーナーの青年期を中心にその根底にある思想を論考することである。

脚注

1 例　え　ば，Keiichi, Takaya. (2008), Jerome Bruner's Theory of Education: From Early Bruner to Later Bruner. Interchange: A Quarterly Review of Education, v39, n1, 1-19，嶋口裕基（2011）「ブルーナーの教育論における「文化」変化：文化の弁証法」の教育的合意に着目して」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊（19-2）』 早稲田大学大学院教育学研究科

203-213 頁など。

2 例えば，平光昭久（1973）「「教科教育改善の拠点としての構造と論理の直観と操作の教育の学校教育，教科教育，各教科教育における位置と役割について」ブルーナーがピアジェから攝取したもの」『日本教育学会大會研究発表要項』 日本教育学会　21 頁，牧野宇一郎（1972）「ブルーナー教授の「デューイの後に来るもの」について－デューイの「私の教育学的信条」との比較－上」『人文研究 23（6）』 大阪市立大学文学部　17-54 頁，牧野宇一郎（1972）「ブルーナー教授の「デューイの後に来るもの」について－デューイの「私の教育学的信条」との比較－下」『人文研究 24（4）』 大阪市立大学文学部　193-211 頁など。

3 『心を探して』 485 頁

4 『心を探して』 488 頁

5 ジュリアは，初恋の人としても語られている。

6 Bruner, J. (1983), In Search of Mind : essays in autobiography, New York: Harper & Row p.21.　ジェローム・ブルーナー著；田中一彦訳（1993）『心を探して：ブルーナー自伝』 みすず書房　32 頁

7 Ibid. pp.21-22.　同上　32 頁

8 Ibid. p.15.　同上　22 頁

9 Ibid. p.7.　同上　8 頁

10 Ibid. p.5.　同上　6 頁

11 Ibid. p.17.　同上　26-27 頁

12 Ibid. p.18.　同上　28 頁

13 Ibid. p.21.　同上　33 頁

14 Ibid. p.8.　同上　11 頁

15 Ibid. p.21.　同上　32 頁

16 Ibid. pp.11-13.　同上　16-18 頁

17 Ibid. pp.16-17.　同上　25 頁

18 Ibid. pp.10-11.　同上　15 頁

19 Ibid. pp.10-11. 同上　15-16 頁

20 Ibid. pp.10-11.　同上　14-16 頁

21 Ibid. p.14.　同上　20 頁

22 Ibid. pp.10-11.　同上　14-16 頁

23 Ibid. pp.4-5.　同上　4-5 頁

24 Ibid. p.20.　同上　32 頁

25 Ibid. p.7.　同上　9-10 頁

26 Ibid. pp.8-9.　同上　11-12 頁

27 Ibid. p.9.　同上　11 頁

28 Ibid. p.9.　同上　13 頁

29 H.Levin (1984) “Psychologist’s memoirs : In Search of Mind.”, Science, Vol.24, 18. May

30 Ibid. Bruner(1983) pp.19-20.　前掲　訳書『心を探して：ブルーナー自伝』 30 頁

31 Ibid.『心を探して』同上　8 頁

32 ブルーナーの父親は，懐疑的で，首尾一貫した思想体系への反発へと誘う要因となったことが語られている。

33 Ibid. Bruner(1983) p.21.　前掲　訳書『心を探して：ブルーナー自伝』 32 頁

35 Ibid. p.6.　同上　8 頁

36 Ibid. p.20.　同上　31 頁